

インパクトファクター

会誌編集部

「図書館員のツボ」は、図書館員の皆さまが日頃抱えている素朴な疑問や、ぜひ調査してもらいたいといった内容に編集部が体当たりでお答えする新企画です。また引用文献やデータベースも併せて紹介しますので、参考にしてください。

皆さまからの質問をどしどし受け付けております！ また編集部の回答に対してのご意見もお待ちしております！

インパクトファクターとは？

インパクトファクターとはある雑誌において1論文あたり平均何回引用されているか（被引用率）を表した数値で、過去2年の論文が次に続く1年にどれだけ引用されたかが基準となる。つまり、雑誌の影響力を表し、インパクトファクターが高いほど影響力や重要度が高い雑誌と言える。

どのような時に役立つのか？

同じジャンルにおける重要度の比較を行いたいときに利用できる。つまり、雑誌の出版部数、発行頻度、刊行年数の長い・短いによる偏りを除いて比較することが可能である。右記に医学一般ジャンルの主要雑誌の2004年のインパクトファクターを記す（表1）。これによると「New England Journal of Medicine がいちばん引用されていて、重要度の高い雑誌」という結果になる。

表1. 主要雑誌のインパクトファクター

New England Journal of Medicine	38.57
Lancet	21.713
JAMA	24.831
British Journal of Medicine	7.038
Annals of Internal Medicine	13.114
Internal Medicine	0.574

算出方法

インパクトファクターは直前2年間のデータを使って年に1回発表される。例えば2005年のインパクトファクターは、下記のように算出される。

インパクトファクターの計算式 = A/B

A = 2003年～2004年にある雑誌に掲載された論文が、2005年中に引用された被引用回数

B = 2003年～2004年にある雑誌が掲載した論文総数

インパクトファクターの調べ方

インパクトファクターはトムソンサイエンティフィック社の出している Journal Citation Reports に掲載されている。Journal Citation Reports は CD-ROM 版、または Web 版が販売されている。更新は年1回で6月頃に行われている。

インパクトファクターをめぐる問題

科学者達は自分の論文を少しでもインパクトファクターの値が高い雑誌に投稿しようと躍起になっている。そのため、インパクトファクターをめぐるさまざまな問題が生じている。

業績にインパクトファクターを記載する

- ある大学では教授選考の際に提出する業績に、発表した雑誌のインパクトファクターの記載を要求し、研究者の評価を行っている。インパクトファクターは雑誌の影響力や重要度を測る数値であり、個々の研究者の業績を評価する値ではない

特定雑誌の値が高い

- インパクトファクターランクでは、Review 論文を掲載している雑誌が上位を独占している。原著論文を同じように比較するのは適当ではない
- インパクトファクターは2年間という短期間の間に引用された回数で計算するので、すばやく影響力を与えるような雑誌の方が値が高くなる傾向がある。長年にわたって少しずつ引用されるような雑誌は相対的に値が低くなる
- オンラインジャーナルに無料でアクセスできるような雑誌は、有料の雑誌より利用者が多く、定量的な算出を行えない

編集者の不正行為

- 編集者が自誌のインパクトファクターを高めたいばかりに、投稿者に自誌の文献を引用するよう要請していた事実が発覚した

以上のようにインパクトファクターは科学界において、雑誌の影響力を知るには重要な値であることがわかった。しかし、それを大切にする余りに、間違った方向へ進んでいる事実があることも知ることができた。愛知淑徳大学の山崎茂明教授は「インパクトファクターの問題を正しく理解したうえで、科学的な指標として活用する価値はある」と提唱している。

今回参考にした資料を下記に示した。ぜひ全文を読んで、病院図書館へどのような影響があるのかを検討していただきたい。

参考文献

- 1) 山崎茂明. インパクトファクターを解き明かす. 東京: 情報科学技術協会; 2004.
- 2) 東邦大学医学メディアセンター <http://www.mnc.toho-u.ac.jp/mmc/inoyo/inoyo.htm>
- 3) 棚橋桂子: インパクトファクター. 本来どう見るべき数字で、どう使うと有効か? 薬学図書館. 2005 ; 50 : 147-51.
- 4) 山崎茂明: インパクトファクターとは. 医学のあゆみ. 2004 ; 208 : 624-5.

(文責: 若杉亜矢)